

IX. ヨブ ①



ヨブ記は、正典としてははるかに後の時代に含まれるようになったようですが、ヨブが生きた時代については、わからないことがたくさんあります。ヨブ記をここに含めることにするのは、その設定と響きが族長時代のものにほかならないためです。例えばヨブは、他の族長たちのように自分の手でいけにえを捧げています。ヨブの富は、家畜やしもべたちなど、アブラハムの富と同じような形で測られています。また、ヨブの寿命もまた、族長たちの生きた年月の長さと同じようなものだったと記されています。

人がほとんど人間としての忍耐の限界を超えて試練を受けたというこの最も顕著な物語において、ヨブ記における祈りは全く新しい次元のものとなっています。ヨブの姿から私たちは、自分を取り巻く環境がいかなる合理的な説明も通用しないような状況に直面するに至って、どのように祈らないべきか、そして、どのようにさらに良く祈るべきかを学ぶことができるでしょう。「ああ、私の願いがかなえられ、私の望むものを神が与えてくださるとよいのに。私を砕き、御手を伸ばして私を絶つことが神のおぼしめしであるなら…」(ヨブ 6:8-9)。

人は絶望すると、行くべき道が見えなくなります。死を求めて祈るようになることも稀ではありません(民 11:11-15、I列王 19:4、ヨナ 4:3を参照)。しかし、神がそのような願いを聞き入れておられる例は、聖書の中に一例もありません。ヨブの問題は、あらゆる生きとし生ける者の問題と同様、神の目的が見きわめられないところにありました。また、眼前に見える今を超えるものが見きわめられないというところにありました。そのような中では、神の真理は、なかなか人の心に息づくことはできず、人は、闇を深める首謀者であるサタンと格闘しなければなりません。しかし、クリスチャンには素晴らしい助け主(パラクリート)(慰め主、助け主、助言者)がいてくださり、助け慰めてくださいます。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます」(ローマ 8:26)。

それでは、私たちは人生の最も暗い時期、最も厳しい試練にどのように取り組むべきなのでしょう。圧倒されるような状況に直面し、答えを見つけることが全くできないような時、回復に向けた希望がいつさい消え去ってしまったような時、死のみが唯一の逃げ道であるかのように思われる時、私たちは何をすべきなのでしょう。「信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます」(ヤコブ 1:3-5)。

神の目的

問題から即座に解放されることは、神のみこころではないのかもしれませんが、しかし、そうであるならば、神は、私たちがご自分の意図するところを理解し、それに従順であることができるように、私たちに知恵を与えることがおできになります。熾烈な環境に置かれると、人は答えを求めます。そして、少なくとも部分的に

であれ、その環境がもたらされている理由の一つが、神が知恵を与えてくださることなのだという結論に至るかもしれません。強力な圧力なしに、永遠の価値を持つダイヤモンドは現れてこないのです。

人とは何者なのでしょう。あなたがこれを尊び、これに御心を留められるとは。また、朝ごとにこれを訪れ、そのつどこれをためられるとは。いつまで、あなたは私から目をそらされないのですか。つばをのみこむ間も、私を捨てておかれませんか。私が罪を犯したといっても、人を見張るあなたに、私は何ができましょう。なぜ、私をあなたの的とされるのですか。私が重荷を負わなければならないのですか。どうして、あなたは私のそむきの罪を赦さず、私の不義を除かれませんか。今、私はちりの中に横たわります。あなたが私を捜されても、私はもうおりません。(ヨブ7:17-21)

ヨブはこの例において、神が人間に過ぎない者たちに関心をお向けになることについて、神にその理由を求めています。そもそも、永遠なる神がなぜ、私たちのような価値なき被造物に関心を抱かなければならないのでしょうか。ギリシアのエピクレス派の哲学者たちは、神は、この世界、また、その中で起こることには何の関心も抱いておられず、ご自分を邪魔するもの、煩わせるもの、不機嫌にさせるもの何もない、安心と平穏の中に住んでおられると主張しました。しかし、ヨブはその逆こそ真理であると考え、「神、あなたはなぜ、そのように人をご覧になっているのですか、なぜ私のような一人の人間にそこまで関心をお持ちになるのですか?」と問うたのです。

私たちもまた、終わるところのないかのように思える試練や試みのただ中であって、同じ祈りを捧げていることに気づくことがあるかもしれません。私たちの中には、非常に詳細にして区別のないかのように思われる善と悪とがあり、私たちはそれを区別することができないのですが、神はこの善と悪とに関心を抱いておられるのです。逆の見方、すなわち、神は人間の置かれている環境についてご存じない、あるいは関心を抱いておられないとする見方は、神のご性質をほめたたえるものとはならず、むしろそのご性質に対する敬意を損なうものなのです。

? 質問

1. 忍耐の限界を超えて試練を受けたヨブの姿から私たちはどのようなことを学ぶことができるか?
2. ヨブが苦しんでいた問題はどんなことか? わたしたちならその時どのような助け主に期待できるか?
3. ヨブのような試練に直面した時、あなたならどのような祈りを神にささげるか?
4. 問題から即座に解放されることが神の御心ではないと思える時、神は私たちのために何をしようとしておられると考えるか? あなたも同じように思える時があったか? その時あなたは何を学ぶことが出来たか?
5. ヨブの祈りから教えられることは、神は私たちの生活に関心を向けておられるという事。神は自分には関心を抱いておられないのだと思っていた出来事がありますか?
6. 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられたか? どんなことを実践したいか?